帝塚山大学子育て支援センター紀要　第２号　43 ～ 52（2021）

小大英語教育連携事業から観察された児童と学生の学び

A Study of Elementary School Students' and University Students' Learning Through English Education With a Cooperated Program of Teachers from Both Institutions

黒川　愛子[1]・森本　敦子[2]

Aiko Kurokawa・Atsuko Morimoto

本研究は小学校英語授業の充実と児童の英語学習への興味・関心の向上，及び，学生の小学校教員志望実現に向けての指導力向上を目的に実施されたものである。両教員が連携し，いかなる小学校英語授業の設計を行うことができ，その取組が児童と学生にどのような教育効果を発揮できるかを探究した。本研究では学生による小学校英語発表会と小学校英語公開授業の参観及び英語授業参加という3 つの取組を通して，児童と学生において，いかなる学びが観察されたかを報告する。結果として，両教員が設計し学生が加わった英語授業は，児童にやり取りへの意欲を与え，学生は小学校英語授業への実践的な学びを通じ，進路実現への意欲を高めたことが観察された。

1. はじめに

1.1 研究の背景

文部科学省（2017a）により小学校「外国語活動」「外国語科」の全面実施が開始され，それらをいかに行い，中学校・高等学校英語教育につなげていくかは重要課題である。文部科学省（2017b）では 2017 年 4 月時点で，233 件（小学校 2,392 校）が教育課程特例校として，低学年から「英語科」や「外国語活動」等を導入していることを報告している。日本英語検定協会（2016）では，国・公・私立小学校設置者 1114 件中，低学年の外国語活動が必要であるという意見が全体の 75.7％で，その理由の第 1 位は「コミュニケーション能力の育成につながる」であったことを報告している。ベネッセ教育総合研究所（2019, p. 16, pp.19–20）は全国の 8,544 名の小学生の保護者の回答結果から，「英会話・英語教室」が 1～3 年生の男女及び 4～6 年生の男子の習い事の第 3 位で，8 割を超える保護者が「実際の場面で使える英語力を身につけさせたい」と回答したことを報告している。全面実施以降，学外での英語学習量が増えることも予測される。文部科学省（2020）は，公立小学校 19, 187 校を対象に行った英語教育実施調査において，第 5・6 学年の「外国語活動」又は教科としての外国語を主として担当する教師の区分は学級担任の占める割合が 70.5 %であり，学級担任，専科指導担当教師，ALT 等のそれぞれのよさ，役割の理解を深め効果的に力を発揮できる指導の充実の必要性を掲げている。

本研究の参加者は，小学校教諭を目指す本学現代生活学部こども学科 3・4 年生及び帝塚山小学校第 3 学年児童である。本研究は，2019 年度帝塚山学園「教育連携提案事業」における「本学・帝塚山小学校英語教育連携事業（以下，連携事業）」として，小学校英語授業の充実と児童の英語学習への興味・関心の向上, 及び, 学生の小学校教員志望実現に向けての指導力向上を目的に実施されたものである。教育連携という視点から，小学校教員と大学教員（以下，小大教員）が協働して，どのような小学校英語授業の設計を行うことができるか，及び教育連携の取組が児童と大学生（以下，学生）に対して，

[1] 帝塚山大学 教育学部 准教授
[2] 帝塚山小学校 英語科 主任教諭

どのような教育効果を発揮することができるかを探究する。本研究では，学生による帝塚山小学校英語発表会（以下，英語発表会）と帝塚山小学校英語公開授業（以下，英語公開授業）の参観，及び英語授業参加の 3 つの取組を紹介し，それを通して観察された学生の学びを報告する。

バトラー後藤（2015, pp.172–176）は早期英語教育の大きな鍵はインプットの充実と動機づけを高めることであり，小学校段階では子どもたちが興味をもつやり方で良質のインプットをできるだけ多く与える重要性を強調している。Shin & Crandall（2014，pp. 124–125）は more message-oriented or based on meaningful activities within a realistic context（現実的な場面を伴う意味重視の活動）の重要性を強調し，児童へのスピーキング指導における 7 つの基本原則の 1 つに Use speaking activities that reflect real-life communication（実生活でのコミュニケーションを反映したスピーキング活動）を挙げている。本研究では小大教員は小学校英語授業に学生が加わり児童に興味付けを与えるインプットを行い，海外の小学生に自己紹介ビデオを送る取組の前段階として初対面の児童と学生が英語で自己紹介し合うという授業設計を行った。児童の学びについては，上記の授業（以下，協働授業）からの報告を行う。

2. 先行研究

小学校英語授業に関わって，柳瀬・小泉（2015, p.48, pp. 52–53）では，英語教育再創造の際に重視するべきは身体実感であり，英語教育の再創造はそれ以降の英語教育の土台となる小学校を基盤とする，としている。バトラー後藤（2006, p.203）は，FLES（Foreign Language in the Elementary School）のカリキュラムには柔軟性を持たせ，子どもが自主的に外国語を学んでいく姿勢を尊重すること，つまり，教え込むのではなく児童の潜在能力を十分に生かしながら児童が主導権を握れるようなカリキュラム作りが大切であるとしている。

児童の意識に関わっては，染谷（2019）が Reeve & Jang（2006）の作成した自律性支援に関する項目を参考に，児童の自律性の欲求が充足され自律的な動機づけを高めるための重要点として，「児童一人一人の発言や意見を注意深く聞く」こと，「児童が十分に話す機会を提供する」こと，及び，価値づけを促すために「今学習していることに価値を見出せるように促す」ことを挙げている。吉田・相川（2013）では，教員志望の大学生が指導を行う小学校英語指導ボランティアプロジェクトにおいて，課外活動としての土曜英語講座に参加した児童へのアンケート調査を行った。その結果，月 1 回年間 8 回中，7 月・8 月では「とても楽しかった」が 8 割を超え，「他人に薦めたいか」という質問に対して 20 名中 19 名が肯定的な回答をし，その理由の一位は「活動が楽しかった」であったと報告している。

協働的な授業実践に関わっては，「外国語活動」における協働的な授業実践の成果を児童の自己評価カードの質的分析から検証した小桐・島谷・前田（2019）は，学習者が学習者間または指導者と相互にやり取りをしながら真正性のある目標実現に向け意欲を維持または向上させていると報告している。

大学生に学校現場の授業を見せる効果を探る研究として，階戸（2017）は英語科教員志望の大学生に小中高の英語授業を各 1 回参観させ，学生の振り返りから，その意識を質的に分析した。その結果，授業観察を重ねるごとに授業を見る視点の深まりが見え，学生の視点が児童・生徒へ向けられ，教師を目指すことに対する動機づけになると報告している。吉田・相川（2013）は，土曜英語講座で複数回，指導を行った学生へのインタビューも実施し，学生の小学校英語指導の教材作りに関する理解が深まり，大学での模擬授業とは異なり小学生と直接接することで，いかにして子どもが理解しやすく英語を発しやすい指導を行うかを実践的に理解したようであるとしている。吉田・相川（2015）では，教員を目指す学生の小学校英語活動ボランティアにおける観察記録の比較を行い，授業評価のポイントを示したチェックリストなどでの評価をしながら，指導実践後の振り返り活動を継続的に行うことが，指導実践に大きく影響することが分かったと報告している。

本研究における，小大教員の教育連携（以下，教育連携）による授業設計では，児童に身体実感を与え，児童が学習内容に価値を見出し自主的に学ぼうとする態度が育成されることを目指している。児童と学生双方にとって意義ある教育連携の一提案としたい。

3. 本研究の概要

3.1 研究目的と研究課題

本研究の目的は，小大教員が教育連携を行うことにより，児童と学生双方に教育効果ある取組を探究することである。本研究では以下の研究課題を設定した。

研究課題 1: 小大教員が連携し設計を行った，児童と学生の協働による小学校英語授業において，どのような児童の学びが観察されるか。

研究課題 2: 小大教員が連携し設計を行った，児童と学生の協働による小学校英語授業及び教育連携の取組全体において，どのような学生の学びが観察されるか。

3.2 方法

本研究における参加者は連携事業に参加した学生 15 名と第 3 学年児童 39 名である。児童は第 1 学年から週 2 時間の英語授業を受けている。大半は簡単な教室英語や英語の質問を理解することができるが，予期しない質問や高度で複雑な英語で問うと理解することを諦めてしまう児童も存在し，英語力の差は大きい。学生は小学校英語に関わる学びや模擬授業の経験はあるが，「英語科教育法」等は履修せずに，小学校英語教育に関わる学びが十分ではない者も含まれた。

3.3 手順

3.3.1 英語発表会における児童の発表と学生の参観

連携事業における 1 つ目の取組は，学生 6 名と黒川による英語発表会参観である。2019 年 12 月上旬に行われた英語発表会の参観目的は，全学年児童の英語による舞台発表の様子を参観・観察することであった。英語発表会は児童の日頃の学習の成果を発表する場として毎年行われ，全校児童が学級ごとに舞台上で英語チャンツ，英語スピーチ，英語劇，英語によるプレゼンテーション等を行う。学級担任も児童と一緒に舞台に上がって英語を披露し，保護者も参観を行う。第 3 学年児童はアルファベットに関連する寸劇発表を行った。

3.3.2 英語公開授業の実施と学生の参観

連携事業における 2 つ目の取組は学生 14 名による 2020 年 1 月下旬に行われた英語公開授業の参観である。取組目的は，(1) 大学での「英語科教育法」等での学びの継続として，実際の小学校英語授業を参観し学ぶこと，と (2) 後日，児童との協働授業に参加することを意識して授業の様子を観察すること，の 2 点である。英語公開授業は最終的に「小学校と交流のあるフィンランド，オーストラリア及びイギリスの小学生に自己紹介ビデオを送ること」を目的とする指導計画 5 時間の 2 時間目で，「英語での自己紹介を知ること」が目標であった。児童は第 1 学年から「聞く力」「話す力」の習得に加え，徐々に単語を書く活動にも取り組み，第 3 学年からは英文を書く活動も始めている。授業では *We Can! 2*（2018）の Unit 1 の題材を用いた学習も行った。

表 1 に英語公開授業の概要を示す。紙面の都合で，主な学習活動のみを示す。

表 1　英語公開授業の概要

段階	主な学習活動
導入	1.英語で挨拶をする。2. Please Game をする。3. “Left and Right Song”を歌う。
展開	4. スポーツ，習慣等の動作を表す英語を学ぶ。（*We Can! 2* Unit 1 p.7　Let’s Play 4 Pointing Game を活用し，教師が提示する絵カードの英語を聞いてリピートする。） 5. 消しゴムレースをする。6.海外の小学生に送る自己紹介映像内で伝えたい内容を考える 7. “*We Can! 2*” Unit 1 p.8　Activity 内の自己紹介文を聞く。
まとめ	8. 聴き取れた英語を発表する。教師が黒板に書いた英語を写す 9. 本時の学習のふり返りを Can-Do シートに書く。10 英語で挨拶をする。

3.3.3　児童と学生の協働による小学校英語授業

連携事業における 3 つ目の取組は，筆者らと外国人教員の計 3 名に加え，学生 7 名が student teachers として児童の学習指導の補佐及び学習支援を行う公開英語授業の 1 週間後に行われた協働授業である。本時では児童は「海外の小学生に自己紹介をしよう」のビデオレター作成に向けてのアウトプット活動を行った。本時の目標は，（1）動作を表す英語を聞いて理解し，言うことができる，（2）他者の自己紹介の英語を聞き，その内容を理解することができる，（3）他者の英語による自己紹介を聞き，その内容に関わって，相手に配慮しながらやり取りができる，の 3 点である。筆者らは児童には授業に楽しく参加しようという姿勢があり新しい試みに対しても対応することができると捉え，先述した視点から授業設計を行った。児童は日頃から英語を聴き動作を行うことで理解を進める TPR（Asher, 2009）を豊富に用いたインプットで学んでおり，筆者らは TPR を用いた活動や英語でのやり取りに学生が加わることで，児童の英語学習への関心意欲を高めたいと考えた。学生の参加目的は，豊富なインプット・アウトプットを行う英語授業に student teachers として参加し，小学校「外国語活動」「外国語科」の指導の在り方を学ぶことである。

表 2 に協働授業における概要を示す。表 2 内の T1 は大学教員, T2 は小学校教員，T3 はネイティブ講師，ST は学生を示す。T1,T2, T3, ST の活動の欄では，ST の活動を中心に示す。

表 2　協働授業の概要

分	児童の活動	T1,TS2, T3, ST(s) の活動
5	挨拶，T2 の説明を聞く。 T1，STs と英語でやり取りをする。Hello. Nice to meet you, (too). I’m ～. It’s Monday. It’s January 27th. It’s ～.	T2, T3 が挨拶を行い，大学教員と学生が授業に加わる説明を行った後，T1&STs が Hello, I’m ～. Nice to mee you. How are you? ST1: What day is it today?　ST2: What’s the date today? ST3: How’s the weather today?　T1 が本時のめあてを確認する。
4	TPR Warm Up. T1 の英語を聴いて T1, T2, STs とともに動作を行う。	T1 が英語で指示を行い，T1,T2, T3, STs 全員で動作を行う。
4	T1 の説明を聞く。 STs の自己紹介を聞く	T1 の英語での説明のあと，STs は一人ずつ自己紹介を行う。 STs: I’m ～. I’m twenty-one. I like ～. I don’t like ～. I can ～.
5	英語を聴きジェスチャーを行う。 発話練習と missing game をする。	T1 の英語を聞き，STs は，T1, T2, T3，児童ともにジェスチャーを行い，徐々にジェスチャーを行いながら発話する。 ST4 が中心となって，missing game を行う。

3	T1 と T2 のやり取りを聞き，自己紹介活動のやり方を理解する。つぶやきゲーム : 質問を聞き, 自分の返事を小さな声で言ってみる。	T1 が ST 役，T2 が児童役であると伝え，やり取りを行う。 T1: Hello, I'm Aiko. T2: Hello, I'm Atsuko. T1: I like rabbits. What animals do you like? T2: I like dogs.T1: I like math.（教科名，スポーツ，楽器，動物と話題を変えていく。）T1 が次々と児童に質問をする。
14	列ごとにグループになり，1 人の ST のところに集まる。ST と自己紹介を行う。	ST が担当する列の前に立ち，グループごとに輪になり，児童と自己紹介をし合う。最初は ST が自分のことを言い，児童に質問を行う。 ST: Hello, I'm ～. I like ～. What animals (sports, subjects) do you like? 1 人 1 人に尋ね, 児童が発話しにくい際は Do you like ～? と尋ねる。 ST: Hello, I'm ～. I like ～. What animals (sports, subjects) do you like? 次第に児童から質問できるように促す。Please ask me questions. I'll answer. 児童が質問をしてきたら答え How about you? と質問した児童や他の児童にも尋ねていく。
10	Can-Do シートに記入する。 教員の話を聞き英語で挨拶する。	T2 が Can-Do シートへの記入について説明を行う。 T1 が本時のまとめを行う。T1, T2, T3 ともに挨拶を行う。

表 2 で示したように，協働授業における学生の活動の中心は小グループで輪になって座り，児童と自己紹介のやり取りを行うことであった。

3.4　分析の方法

3.4.1　小大教員による児童観察と児童の振り返りシート

協働授業における児童の状況については，小大教員による児童観察及び授業録画ビデオを見ての観察と考察を行う。児童の学びへの意識については，泉・長沼・島崎・森本（2016）でも紹介している Can-Do Sheet（以下，CDS）を用いて分析する。CDS は授業の最後に配布され，児童は CDS 内の授業内容への参加度に対する質問（①聞いた英語の意味がわかって動くことができますか，②自分で自己紹介ができますか，③今日の活動に進んで参加できましたか），に回答し，自身の学びを振り返り，自由記述も行った。本稿では児童の自由記述を「学生に関する記述」,「自己の学びの態度に関する記述」,「学びの形態（グループ活動）に関する記述」及び,「授業内容（動作の学習）に関する記述」に分けて分類を行う。また，児童が「学生さん」,「大学生」,「大学生の先生」,「学習生」という語を用いて記述している内容に着目し，児童の視点からの教育連携の取組についても考察を行う。

3.4.2　学生への質問紙

学生の振り返りについては 3 つの取組とも自由記述の振り返りシートを用いた。協働授業においては，活動設計，活動実施，児童観察，児童内省，児童介入，及び活動調整について項目ごとに振り返る「教員用リフレクションシート」も用いた。また，1 年後の進路決定後にも振り返り調査を行った。

4.　分析と考察

4.1　分析 1: 小大教員が連携し設計を行った協働授業において，どのような児童の学びが観察されるか。

4.1.1　小大教員の協働授業観察からみえた児童の学び

児童は英語授業への学生の参加を知らされておらず，初対面の学生が前列に並び挨拶や簡単な自己紹介を行う場面では興味津々である様子が観察された。また約 6 名の児童のグループに 1 名の学生が

加わっての自己紹介活動が始まると，児童の表情は柔和で楽しそうな表情となった。恥ずかしそうな児童もいたが，多くの児童は普段よりも自主的に英語を話そうとする様子や，学生の英語を理解しようという意欲をもってコミュニケーションを図ろうとする姿が観察された。自己紹介活動は児童にとっては即興でのやり取りであり，初めに自己紹介を行った学生の発話をお手本にしながら，既習表現を繋ぎ合わせ，伝えたい内容を何とかして伝えようとする姿が観察された。通常授業における自己紹介活動では，互いに知っている者同士のやり取りであり，単なる「英語の練習」である事実を払拭できない。しかしながら，本時では児童は学生という初対面の人とのやり取りの中で，戸惑いつつも諦めずに，前時に使用した *We Can! 2* 内の言語材料や，学生が用いた文型や話題（好きな食べ物，動物，色，等）を参考にしながら伝えたい内容を何とかして伝えようとしている様子が観察された。

4.1.2　CDS の記述内容から観察される児童の学び

表 3 に CDS 内の児童の自由記述の抜粋を原文のまま示す。表 4 内の観点は先述した観点を示す。

表 3　児童の CDS における自由記述（抜粋）

観点	児童の記述
学生	・大学の学生さんが上手に話してくれたから、自分が分からないえい語も少し話せたし、説明が上手で分かりやすかったです。
	・学生さんはとてもやさしかったです。つまったりしたら、ちゃんともう一度聞いてくれました。じこしょうかいはまだまだだけど、あと少しでできそうなのでがんばります。
	・先生や学生さんのじこしょうかいを聞いて、わたしもあんな風になりたいと思います。
	・がくしゅうせいの人とたのしくえいごがはなせてうれしかったです。
	・しつもんには答えられなかったけれど、グループになって自こしょうかいしたときに、先生のわかりやすいせつ明のおかげで、自分から進んで発言できました。
	・学生さんと学習して、えい語はあんまりできなかったです。だけどとても楽しかったです。
	・自己紹介をするときに、(大学生の) 先生がやさしく待ってくれていたから楽しく学習できました。
学びの態度	・えい語で「じこしょうかい」ができるようになってもっとやりたくなった。
	・じこしょうかいがなかなかできなかったけど、がんばれたのがよかったです。楽しかったです。
学びの形態	・いつもは、えい語のじゅ業で進んでさんかできていないけれど、今日は、一つのグループになっていたから、言いやすかったからです。
	・いつもより人数がおおいし、しつもんがわかったからたのしかった。
TPR	・動きをしたとき、楽しかったです。それは動くからわかりやすかったです。

表 3 内の「優しく待ってくれた」という記述から，学生が各児童の発話を真剣に聞く姿勢や英語が出てこない際にも優しく待ってくれたことに対して，児童が感謝の思いを抱いたことが観察される。児童間のやり取りでは相手の発話を待つ気持ちの余裕を持つことは困難な場合が多いが，本時では児童が学生と接し，優しく受容されたことを実感し安心して英語を話す経験ができたことが観察される。「先生や学生さんのようにあんな風になりたい」という記述からも，学生が児童にとってのロールモデルの役割を担ったことが観察される。「なかなかできなかったけど，がんばれた」，「楽しかった」という記述からは，児童が自己の頑張りを評価する自己肯定感を持つことができたと推察される。少人

数グループ内で，初対面の相手に自己紹介を行う経験を通して，「意味のあるコミュニケーション」の場面で，「自己の思いを伝えることができた」という達成感を持つことができたことが観察される。

4.2　分析 2: 小大教員が連携し設計を行った協働授業及び取組全体において，どのような学生の学びが観察されるか。

4.2.1　英語発表会参観における学生の学び

表 4 に参観後の振り返りとして学生が記載した内容の抜粋を項目別に示す。項目は記述内容から筆者らが分別を行った。表 4 から，学生が教員の日頃の指導や児童との関り，教員の工夫，姿勢，熱意の重要性，及び，児童の状況は教員の指導と支援が土台になることを学んだことが観察される。

表 4　学生の英語発表会参加後の振り返り記述内容の抜粋（原文のまま）

項目	記述内容
児童の状況	・児童が生き生きと堂々と発表している姿が印象的で，自信たっぷりに発表出来ていた。 ・児童は楽しみながら表現している。・学年それぞれの素晴らしい演目に感動しっぱなしであった。 ・担任の先生も一緒に発表に参加することで，児童もとても嬉しそうな様子であった。 ・児童がミスをした際にはその周りの児童がしっかりとフォローしていた。
教員の工夫・指導	・児童が英語を話せるようになっていることを保護者にもアピールできる場であった。 ・児童に時間をかけて指導を行わないと，このような発表はできない。 ・教員の指導の良さが発表に繋がっている。・見ている側がとても楽しめる内容で構成されていた。 ・学年の発達に応じた演目で，楽しく親しむ英語から，自分の思いを伝える英語へと変化していた。 ・2 部制で一学年ずつが発表する構成で，児童の集中力を考慮された上での構成であると感じた。 ・児童の鑑賞の様子からも，普段からの児童への教育がよく行き渡っていうことがわかりました。
教員の姿勢	・とても大切だと思ったことは，担任の先生方も一緒になり発表に参加されておられ，先生自らも楽しみながら，児童とともに活躍されておられたことです。
教員の熱意	・何よりも継続して少しずつ身につけるような指導と，発表会をこんなふうにしたい！という先生の熱い熱意があってこその英語発表会であると感じた。

4.2.2　英語公開授業参観における学生の学び

表 5 に学生の英語公開授業参観後の振り返り記述を項目別に示す。項目は記述内容から筆者らが分別を行った。1 週間後に児童との協働授業に参加した学生の記述を中心に抜粋して示す。

表 5　英語公開授業参観の学生の振り返り記述（抜粋）　注：＊は協働授業に参加した学生の記述を示す。

項目	記述内容
児童の状況	＊児童が楽しく英語の授業を受けていたことと英語の理解力の高さに驚いた。
	＊ミニゲームを基にリスニングが行われ，児童も積極的に参加する姿勢が見られました。
	・先生が発しておられる言葉は 9 割近く英語なのに伝わっているようだったことと，児童は月や天気などの綴りも言えていて，1 年生の頃から徐々に覚えてきているのだなと感じました。授業の最後に先生が児童に「これは本当は 6 年生の内容だけど，できるよね」と言っておられ驚きました。
題材の	＊姉妹校で海外の子どもと関わる機会があることで，児童が英語の有用性に気づき，より意欲を増

工夫	して学ぶことができると思った。
	＊大変興味深い内容でした。海外の姉妹校にビデオレターを送るために自己紹介を考えるための基礎を作る授業として，とても掴みが良かったと思います。
教員の工夫・指導	＊動作やゲームを取り入れることで，児童が楽しく学ぶことが出来ていたと思う。
	＊振り返りシートもわかりやすいもので，児童も答えやすかったと思う。また，その振り返りシートが，次の授業に活かしやすい質問内容でとても良かったと思う。
	・児童の英語力を理解された上で授業が行われていたため，児童が次々と楽しそうに発言する様子が見られたのだろうと考えた。
	・様々なゲーム要素を取り入れておられました。一度，学級担任の先生と日本語でゲームをすることで，専科の先生がオールイングリッシュで授業を行う場合にも子どもたちが楽しんで英語に親しむ様子が見られました。自身が授業を行う際は今回の授業を是非参考にさせていただきたいです。
	＊「児童を十分に褒めること」と「段階を踏んで指導をすること」の 2 点が特に学びとなりました。小さなことでも逃さずに褒めることで，児童のやる気や自信に繋がると改めて実感しました。段階を踏んでの指導は，児童の学習理解をきちんと把握し，どのようにレベルを上げて指導すればよいのかを具体的に学ぶことができました。児童の姿から指導法を考える大切さがよくわかりました。次週は student teacher として児童と関われることを楽しみにしています。
	＊先生はほとんどを英語で話されておられましたが，児童に理解しやすいように簡単な英語を使っておられたことがとても印象的でした。児童を褒めることをしっかりされておられ，褒められることで児童は笑顔になり学習意欲も高まり，すごく雰囲気の良い授業だと感じました。このような貴重な経験をさせていただき本当にありがとうございました。

表 5 から，学生が公開授業内での児童観察を通して，教員としてどう児童と接し関わり，指導を行っていくべきかの学びを得て，自身はどのような教員となりたいかを考えていることが観察される。

4.2.3　協働授業における学生の学び

表 6 に協働授業に参加した学生の振り返り記述の抜粋を示す。観点の内容は表 3 に示したものである。表 6 から，学生が自分たちの参加により児童がどのような反応を示しているかよく観察し，その授業形態が児童の発話や姿勢に影響していることを実感していることが推察される。student teachers としての参加ならではの振り返りであると考えられる。

表 6　協働授業に参加した学生の振り返り記述の抜粋（原文のまま）

観点	記述内容
活動設計	・今回は TPR を利用した授業でしたが，学生側の理解や重要性の認識に少し差があったように思われた。十分な準備が必要であったと考えます。・自己紹介を数パターン用意しておきました。
活動実施	・ミッシングゲームを担当させていただき，何よりも私自身が児童と楽しい学びの時間を共有でき，とても充実した時間を持たせていただきました。・自分の英語のスキルに大変不安を抱いていましたが，実際に児童と関わることでそんな不安も気になりませんでした。 ・児童はとても意欲的に参加してくれました。
児童観察	・子どもたちは徐々に慣れ，笑顔で楽しみながら英語に親しんでくれていたように思います。いつもと違う先生から教わるということは，児童にとって真剣に聞くという態度が大いに育つのだな

	ということでした。・自分は公立小学校出身で，私立小学校児童のイメージが全くつきませんでしたが，児童は同じ「小学生」で明るく，私も楽しく授業に参加することができました。 ・小グループに分かれて活動を行ったことによって，児童が意欲的に参加していたと思います。
児童内省	・ポジティブなコメントが多く嬉しかった。
児童介入	・児童が発話した内容をもとに英語で会話を広げていくようにした。
活動調整	・子どもたちの最初の反応で，ミッシングゲームについてのルール説明が必要なこと，動詞をもう一度おさらいすることが必要だと思い，ウォーミングアップ的に楽しい空間を作れるように行いました。・もっと英語を使えば良かったと反省しています。

4.2.4　協働授業に参加した学生の教育連携実施以降の状況

協働授業に参加した学生 7 名中，4 年生 1 名は国立大学教職大学院に進学し，授業実施時に 3 年生であった 6 名中 4 名は公立小学校採用試験に合格し採用が決定した。保育士となる 1 名は小学校英語教育に関する卒業研究に取り組み，1 名はベトナムでの幼稚園教諭勤務が決定した。連携事業が学生の進路開拓への動機付けの一つとなったと推測される。

表 7 に協働授業に参加した学生の取組 1 年後の振り返り記述の抜粋を原文のまま示す。進路実現後にも協働授業での学びを活かそうとする思いが観察される。

表 7　協働授業に参加した学生の取組 1 年後の振り返り記述の抜粋

学生	記述内容
全取組に参加	・自分は英語や外国語の授業を行う際の入口の大切さを学びました。教員がその入口を子どもたちにとって身近に感じやすいものにしておられたからだと思います。このような方法はこれから海外で働く自分にとっても，とても参考になりました。子どもたちに言葉が通じコミュニケーションを取れる楽しさを伝えていければと思っています。
協働授業のみに参加	・協働授業は今後教員として外国語科としての授業作りのアイデアとして役立つと考えています。私立ならではの伸び伸びとした授業から得た学びは公立小学校でも活かせる部分があり，小学校英語は工夫次第でどれだけでも面白くできると感じました。アイデアを膨らませた外国語科を行うことができるよう，今後も様々な授業を見学したりして学び続けていきたいです。

5.　結論

本研究では小大教員の連携のもと，児童と学生双方に役立つ取組とその成果を探究した。短期間の取組であり，今後も児童・学生双方に教育的効果を与える教育連携の探究が必要である。

本研究で観察された児童と学生の学びに関わって，先述の考察を基に以下のことが言える。

(1) 小大教員による教育連携は，小学校教員志望の学生に，小学校「外国語活動」「外国語科」指導への実践的な学びを与え，進路実現への動機づけを与えることができると推察される。

(2) 小大教員の教育連携により，より内容・質を高める「外国語活動」「外国語科」の授業設計を行うことが可能となると推察される。

(3) 小大教員の教育連携により設計を行った協働授業は，児童に意味のあるコミュニケーションの場を与え，児童の英語学習への動機づけや，児童にとって価値あるやり取りへの意欲を与える

ことができると推察される。

全面実施以降，英語教育に関わる各校種教員の連携は重要である。本研究が異なる校種の教員の教育連携の一提案となれば幸いである。

謝辞

本研究における教育連携の機会を与えてくださった帝塚山学園，連携事業に意欲的に参加し，本研究の結果公表に同意してくれた児童・学生のみなさん，様々にご支援くださいました本学園教育連携室の皆様，帝塚山小学校及び本学教育学部こども教育学科の教職員の皆様に厚く御礼申し上げます。

参考文献

Asher, J. J. (2009). *Learning another language through actions (7th edition.)*. California. Sky Oaks Productions.

バトラー後藤裕子（2006）.「小学校での外国語教育―期待すること，考慮すべきこと―」『日本の英語教育に必要なこと』185−206.大津由紀雄編著. 慶応義塾大学出版会.

バトラー後藤裕子 (2015).『英語学習は早いほど良いのか』岩波書店.

ベネッセ教育総合研究所(2019).「第 3 回幼児教育・保育についての基本調査 速報版」https://berd.benesse.jp/up_images/research/All_web.pdf.

泉惠美子・長沼君主・島崎貴代・森本レイト敦子（2016）.「英語学習者の自己効力と自律性を促進する授業設計と評価－Hi, friends! Can-Do リスト試案に基づいて－」『小学校英語教育学会誌』*16*, 50-65.

文部科学省 (2017a). 『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）』文部科学省.

文部科学省 (2017b).『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説外国語活動・外国語科編』文部科学省.

文部科学省 (2020). 「令和元年度公立小学校における英語教育実施状況調査」https://www.mext.go.jp/content/20200715-mxt_kyoiku01-000008761_4.pdf.

日本英語検定協会(2016).「小学校の外国語活動及び英語活動等に関する現状調査報告書」http://www.eiken.or.jp/center_for_research/pdf/market/elementary_press_2712.pdf.

小桐功也・島谷浩・前田康弘 (2019). 「小学校英語教育における協働学習：質的分析方法『SCAT』を利用した検証」『熊本大学教育実践研究』*36*, 51−57.

Reeve, J., & Jang, H. (2006). What teachers say and do to support students' autonomy during a learning activity. Journal of Educational Psychology, *98*(1), 209–218.

Shin J. K., & Crandall J.A. (2014). *Teaching young learners English: From theory to practice*. Boston, MA. National Geographic Learning.

階戸陽太(2017).「現場を見ることが英語科教員志望の学生に与える効果―教職科目を受講し始めた学生の意識を通して―」『四国英語教育学会紀要』*37*, 41−52.

染谷藤重 (2019). 「小学生英語学習の動機づけと聴解力の関連性―自己決定理論の枠組みを応用して―」『鳴門教育大学小学校英語教育センター紀要』*10*, 15−25.

We Can! 2（2018）. 文部科学省.

柳瀬陽介・小泉清裕（2015).『小学校からの英語教育をどうするか』岩波書店.

吉田真美・相川真佐夫 (2013).「課外プロジェクトとしての小学校英語指導について―参加児童の評価および参加学生の変化について―」『研究論叢』*81*, 35–52. 京都外国語大学国際言語平和研究所.

吉田真美・相川真佐夫 (2015).「教員志望の学生による小学校英語ボランティア活動における振り返り活動―振り返り活動の効果について―」『研究論叢』*85*, 57–85. 京都外国語大学国際言語平和研究所.